

禅

30号(通卷210号)



茶禅一味の会記念茶会 献茶式

田草取るなり

田坂 牢関

2008年(平成20年)は経済界にとって、まさに大乱の年でありました。米国のサブプライムローンより端を発した世界同時不況は、瞬く間に世界中に拡大し、欧・米・日の先進諸国は勿論のこと、BRICSと呼ばれるブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカをはじめ、発展途上の国々もこの不況に巻きこまれ、まさに世界大恐慌が始まりました。

長年ビジネスの世界に生きてきた私も100年に一度あるかないかといわれるこの状況には、いささか戸惑いました。

米国では、自動車大手のビッグスリーは、フォードを除いてGM、クライスラー共に破綻はたんいたしました。「20世紀米国」の繁栄を象徴する産業の衰退は世界を驚かしましたが、その余波は日本にも波及し、我が国を代表するトヨタ自動車も今期は赤字に転落いたしました。殊に私たちのような貿易(輸入)業者にとって、2008年という年は誠に変化に富んだ年であったといえます。

2008年の1月から7月までは、東南アジア、中国などからの、原材料(特に石油)や賃金の値上げ、通貨の切上げ等による商品の値上げ攻勢が凄まじいものでした。特に石油の値上げによる影響は著しく、つくづく石油産業の裾野すそのの広さを思い知らされました。

海外メーカーから毎日のように届く値上げ要請で机の上が一杯にな

のような始末で、私はっきりインフレーションになるのではないかと密かに準備を進めていたのですが、^{あに} 豈^{ひそ} 図らんや8月を過ぎてから、原油の相場が1バレルあたり最高147ドルから12月には三十数ドルまで急転直下暴落し、同時に他の原材料も暴落いたしました。

賃金上昇のストップは勿論のこと、日・米・欧の景気下降、株価の暴落により、先進国間の貿易の量は激減いたしました。その影響で世界の工場と言われてきた中国のメーカー工場の倒産件数は膨大な数となりました。

私どもの会社としては国内の得意先に対して商品の供給責任があるため、毎日のように海外駐在員を取引先メーカーの情報収集に走らせざるを得なくなり、海外駐在員は日常業務が滞る有様でした。

今回の大不況で特に感じたのは、中国に進出している外国資本（特に韓国、台湾、香港など）の経営理念の無さです。現在は、恐らく死語になっているのではないかと思います、「夜逃げ」という言葉がぴったりの現象が起こっているのです。

ある日、従業員が工場へ普段通り出勤すると、経営幹部が^{こつぜん} 忽然と姿を消し、取り残された従業員への給料は勿論、取引先への借金もそのままに、スタコラサッサと本国へ逃げ帰るというやり方です。私の聞いた例ですが、山東省にあった工場で、ある日韓国人幹部の30人が忽然と消え、本国へ逃げ帰ってしまったというのです。残された千数百人の中国人従業員が怒り、暴動になりかけて、慌てた地方政府が賃金を立替払いして一時的に事態を収めたそうです。

上記はあくまで中国での話ですが、中国に限らず2008年は東南アジア諸国・欧米など世界中がまるでジェットコースターに乗ったような乱高下に振り回された1年でした。この事実を見て今、日本中、いや世界中の人達が来年はどんな年になるのだろうか心配しているわけ

です。「先の見えない暗闇の中で如何に行動すればよいのか？」この答えは、我が禅門において昔からただ一言「脚下を照顧せよ」と言われています。この言葉はビジネスにおいては原点に帰り、「人を育て」、「商品開発」と「資本の蓄積」を続け、常に「新顧客の開拓」も行うということ。つまり当り前のことを、当り前通りにすることが問題解決のための唯一の手段なのです。

マスコミなどでは100年に一度の大不況などといわれていますが、いささか騒ぎすぎではないかと感じます。世の中、長い間平和が続いたためちょっとしたことで大騒ぎして不安を掻き立てているようですが、考えてみれば戦後の焼け野原から立ち上がり、第一次石油ショック以来幾度となく不況に遭遇し、辛酸を舐めながらも、そのたびに大きく脱皮し、成長してきた日本人は、必ずこの困難を克服できると思います。特に我々のように戦後、闇市場の芋を食って生きてきた昭和1桁生まれの人間にとっては、不況といえども特に慌てることではないのです。もしまた万が一のことがあったとしても、その時はまた芋を食って生きていくまでのことです。

本当に真剣に生きれば、毎日が乾坤一擲即日常茶飯事であると思います。

人間苦勞している時が最も成長している時であり、また悲しい時ほど人の痛みが分かるものです。

芳賀洞然老師の著書『五燈会元鈔講話』に「也風流」とサインを頂いています。真に味わい深い言葉であり、私も最近漸くその味わいの一端を含味できるようになったと思います。

また「一寸先は闇」といわれていますが、人間の知恵では明日のことなど見えはしません。何が起こるか分かりません。その時何をなすべきか？

二宮尊徳翁の詠んだ歌で次のようなものがございます。

この秋は 雨か嵐か知らねども
今日のつとめに 田草取るなり

私たちも一日一いちちゅうこう炷香を忘れず、各々の仕事に励み、当たり前のことを当たり前^にに努めようではありませんか。

著者プロフィール



田坂牢関（本名 / 良昭）

昭和6年生まれ。田坂商事創業後、不二貿易(株)を設立し代表取締役就任。現在、不二貿易代表取締役会長。昭和37年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅師家分上。庵号 / 瞎驢庵。^{かつろ}



茶禅一味の会記念茶会 留護寮